
F@KE × F I L E

架院紅羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F@KEXFILE

【コード】

N0089Y

【作者名】

架院紅羽

【あらすじ】

逃げるようにして村を脱出したアンリたち。そんな彼らの前に不思議な館が姿を現す。それはアンリの夢に見た館そのものだった。

追憶の館（前書き）

二年ぶりの投稿です。
かなり間が空きましたが、完結までまたがんばってみたいと思います。

追憶の館

「いやあ、アンリは力持ちさんですねえ。私を軽々と持ち上げてこんな場所まで運べるとは」

アンリの気持ちを押し量つての事か、バイロンは暢気に笑った。

ここはアンリの根城にしている黒の森の北東部。ここまでは村人たちも気味悪がつて追つては来ないだろう。身を隠すには絶好の場所だ。やっと安堵を覚え、アンリはその場に座り込む。

「お姉ちゃん、大丈夫でしか？」

不意に膝に微かな重みが掛かった。それは心配そうにこちらを見上げるメルだった。

「メル……。ありがとう」

「お姉ちゃん、何か悲しい事でもあったんでしか？元氣ないのでし」

「大丈夫だよ。私はまだ元氣だ」

アンリはまだぎこちない笑みを浮かべた。

「あの……司教さま。あの時は私がやったのではないと信じて下さりありがとうございます」

言わなければと思つていた言葉は自然に口から飛び出た。それは今のアンリの素直な気持ちだった。アンリは赤面しながらもどうにかそれだけ伝える事が出来た。

「分かっていきますよ。アンリ。貴女の魂が汚れ無く純粹である事を」

「そうでし！お姉ちゃんは悪くないでし」

「司教さま……。メルッ」

「アンリ、私の事はバイロンと呼んで下さい」

バイロンはにっこりと笑った。そこでようやくアンリの口元に自然な笑みが浮かんだ。

「わかった。バイロン」

そう言うと、急に何故か気恥ずかしくなって不自然な沈黙が訪れた。するとアンリにはどうしても彼に聞いておきたい事があった事に思い至った。

それを口にする事は躊躇われるのだが、ここで聞かないと、この先彼に尋ねる機会がないだろうという予感もあつた。気付くとアンリはもう無意識にそれを口にしていた。

「パイロン、フィリアって誰の事だ？」

パイロンの顔が一瞬にして硬くなるのをアンリは悟った。

そこには焦りのようなものさえ伺える。

「どこでその名を？」

「それは…、こんな事を言うと思はれないかもしれないけど、夢で見たんだ。雨の日にパイロンと子供が、そのフィリアの事を話しているのを。喪服を着ていたと子供が言っていたが、それは今でも…いや、何でもない。忘れてくれ」

パイロンの表情は髪影で全く見えない。泣いているのかもしれない。

一体、彼はどんな表情でこの話を聞いているのだろう。

ややあつて、パイロンは口を開いた。

「あの日、あの屋敷で私は私を棄てたのです」

パイロンが指さす先は、森を抜けた先にある崩れかけた廃墟だった。

「さあ、行きましょう。アンリ」

「あの…、ここって幽霊とか出ないですよ？」

「おや？アンリは普段は勇ましいのに幽霊は苦手ですか」

「ち…違います。別に怖くなんてない」

バイロンはからかうように笑っている。

それで幾分緊張が解れた。

「で…では、は…入ってみましょう」

ここは夢で見た屋敷そのものだった。

白い壁にはいくつもの窓が規則的に並び、精緻な硝子細工のシャンデリアが天井を彩っている。

そして中央にある、滑らかな曲線を描く階段に、床は大理石で出来ている。その上には天鵞絨らしき真っ赤な絨毯が敷かれていた。

しかし、そのどれも今はすっかり風化して、雨ざらしとなっている。

壁や窓に空いた穴からは、先ほどからすきま風が絶えない。

「ここですよ」

キィ……。

錆び付いた鉄製の扉が開く。アンリは目を見張った。

「わあ…。これ、夢に見たままです。この窓からの景色も同じだ…」

広い部屋を走って窓に寄った。

すっかり風化して、退色した窓の棧に触れてアンリは夢との相違を確認した。

「ここも、ここも全部同じだ。でも夢の中では皆綺麗でした。これって正夢なのかな？それにしても不思議ですね」

「それは不思議な事ではありませんよ。アンリ」

「えっ、それはどうして？」

バイロンはゆっくりとアンリに近づく。

窓から漏れる明かりに彼の端正な面立ちが照らされる。

「貴方は私の古い記憶を詠んだのです」

彼はアンリの横を通り過ぎて、窓辺に寄った。

そして、何かを懐かしむように硝子を失った窓枠に触れた。

「あの夢には、バイロン…貴方の姿もあった。ではあれは貴方の過去？でも、どうしてそれを私が……」

「貴方に見せたかったのではないですか？私の至らなかつた過去の姿を……」

そう呟いたバイロンの横顔には、深い悲しみがあつた。

「それは、一体誰が見せたんだ？」

アンリはやつとの思いで声を絞り出した。

「暁の吸血鬼……。私がヴァチカンより賜つた命の首謀者」

「はっ！」

次の瞬間、アンリは全身を雷で打たれたかのような衝撃を受けた。

「まさかそれがレイナを襲つた犯人？では、その人とバイロンは知り合いなのでは……」

バイロンは何も答えなかつた。

だが、アンリはそれを肯定と受け取つた。

「いいですか、アンリ。よく聞いて。暁の吸血鬼、アレクセイは私の義兄です」

「義兄……？」

アンリの顔から表情が消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0089y/>

F@KE x F I L E

2011年10月29日02時13分発行